市が魅力を、価値を、エネルギーを「私に」伝える情報紙
To 広報とめ トゥー・ミー Me
2 Feb 2022 Vol.321

ときめき人

Tokimeki bito

古代米稲藁で新年に66俵編み土俵を守る

米山町・的場

柳渕 雄亮さん

やなぎぶち　ゆうすけ
1929年生まれ　　血液型／ＡＢ型

Profile

手先が器用で、多数の作業を自分でこなす92歳の雄亮さん。趣味は、庭の手入れや畑仕事。ターゲットゴルフをするのが楽しみ。

追土地地区にある流観世音（ながれかんぜおん）の鳥居に飾るしめ縄を作り、雄亮さんは毎年奉納している

その昔、米山町の追土地地区の流観世音（ながれかんぜおん）には、相撲の土俵があった。今から遡ること３～４世代前の先人たちは、そこで相撲を取っていた。飛鳥未来きずな高等学校（旧米山高等学校）地内にも、相撲の土俵はあった。明治時代を生きた的場・追土地地区の先祖らは、土俵用俵を編み、土を入れ、新年に土俵の俵を入れ替え作業してきた。この土俵俵づくりの技術は、長年にわたり受け継がれていたが、1970年代に入り、相撲を取る若者がいなくなり、一度は土俵づくりも途絶えた。

道の駅米山ふるさとセンターＹ・Ｙ前には、米山町中津山地区出身の丸山権太左衛門（ごんたざえもん）（元大相撲力士で第３代横綱、本名＝芳賀銀太夫（ぎんだゆう））の偉業を称える銅像や土俵が設置されている。その土俵を守り、新年を迎える１月に合わせ、雄亮さんは毎年66俵を編み続けている。俵のわらは、息子の亨さんが作った古代米を11月に稲刈り後、足踏み脱穀で脱穀したわらで作る。古代米の稲の長さが、俵にちょうどいい。出来た俵に米山相撲協会の会員が、育苗用の土を入れ、毎年土俵を掘りおこして俵を入れ替る作業を続け、いつでも相撲の大会ができるよう、土俵を守り続けている。雄亮さんは、昔自分で米俵を約400俵編んだ経験から、この俵づくりを始めた。このほか、地区の小学４年以上を対象に、正月に飾るしめ縄づくりを毎年12月に教えている。俵は縄で、全部で７カ所結っており「本場所同様に化粧俵、踏み俵もあり、そろえて整備されているのはとても珍しい」と雄亮さんは話す。

編集後記

▼「新田新駅舎完成」の記事の取材では、昔の写真の提供や当時の駅周辺の様子を教えてもらうなど、地域の人々からたくさんの協力をもらいました。「地元の宝」と胸を張れるものがあることと、そう思える地域の人々の愛情に、心が温まりました。（三浦）

▼市民の広場を取材しました。皆さんは「誰かのため役に立ちたい」、「心には心で」と見返りを期待しない物語思考があり、琴線（きんせん）に触れる（＝感動や共鳴を与えること）機会が多いです。自他同然のギブ・アンド・ギブのあり方は幸せな生き方に通じる道との思いに駆られます。（髙橋）

▼「学校給食への市産食材提供事業」を取材。別室に児童たちと同じメニューを準備していただき、登米市が全国に誇るだて正夢の新米と登米産牛を堪能しました。よみがえってきた自分が給食を食べていた頃の思い出と一緒に、31年ぶりの給食を噛み締めたひとときでした。（佐々木）

広報とめ（2月号）
発行日／令和4年1月19日　発行／登米市
〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字中江二丁目６番地１
編集／まちづくり推進部まちづくり推進課 広報係
TEL.0220-22-2147　FAX.0220-22-9164
E-mail:koho@city.tome.miyagi.jp　印刷／川内印刷株式会社

登米市公式ホームページ
（新型コロナウイルス感染症の影響に伴うイベント中止などの情報は市公式ホームページでお知らせしています。）https://www.city.tome.miyagi.jp/

登米市メール配信サービス
（防犯や防災、イベント・市政に関する情報をメールでお届けします。）
https://mail.cous.jp/tomecity/